

令和5年度 第3回 学校運営協議会 記録

R5.11.28 (火) 13:30～15:30

※外部参加者（学校運営協議会委員）

木下清史氏（三方原地区根洗町自治会長）

宮津輝雄氏（細江地区湖東自治会長）

安達 広氏（社会福祉法人聖隷事業団 医療保護施設・地域医療支援病院
総合病院 聖隷三方原病院 執行役員・事務局長）

堀内 剛氏（浜松市社会福祉事業団 浜松市発達医療総合福祉センター
福祉センター所長）

加藤久貴氏（弁護士法人 リコネス法律事務所 弁護士）

山田浩昭氏（静岡県総合教育センター 専門支援部特別支援課 特任教官
前浜松特別支援学校長）

松本浩一氏（西部特別支援学校 PTA 会長）

※校内参加者 校長、副校長、教頭、事務長、小学部主事、中学部主事、高等部主事、 訪問教育主任、教務課長、総務課長

<学校運営協議会>

1 開会の言葉

2 校長挨拶

3 協議

(1)「子供たちのための学校の働き方改革 できることを直ちに、一緒に」（文部科学大臣メッセージ）を受け

【地域とのつながりについて】

・ボランティアの募集について（チラシ、配布方法などについて）

副校長：教師と保護者・地域住民との役割分担等の見直しが必要となってきた。児童生徒の休み時間における対応や校内清掃、部活動などを地域のボランティアの方と一緒にやっていけるのではないかと考えている。ボランティア募集のチラシを配布したり地域に掲示したりしている。他にはどのようなことができるか、募集の仕方はよいかなどを相談したい。

A委員：メンタルで休職する特支の先生は、普通小学校等と比べて倍以上いる。

副校長：TTの教員間、保護者等の人間関係でうまく処理できずに休む人が多い。

校長：職員の相性、保護者との距離が近い等でストレスがかかる。若い職員が多い。

B委員：教員採用試験の倍率も下がっている。

副校長：コロナ禍で介護体験がなくなり、特支の先生を目指す人も減ったのではないか。

B委員：コロナの影響は、特別支援学校は特に大きな影響を受けている。

校長：職員同士が相談しやすいような風通しの良い職場を作っていきたい。

小学部主事：それぞれの先生の良さ、長所、特技を運営に活用していくことで、お互いに認め合える職場を作っていきたい。

教 頭：OJT を使い、若手を育てている。

チラシは、学校だよりと一緒に回覧している。Instagram の QR コードも載せている。広報の仕方を模索している。

D 委員：自治会活動のメインは女性が多い。働いている人も多いが、女性部や子供会などを通じて募集してもよいかもしれない。自治会長としても、個人に焦点を当てて声を掛けてみたい。どのようにフィードバックしていくか、自治体としても考えていきたい。

E 委員：西部特別支援学校について、地域にあることは知っているが、関心はあまりない、という地域住民が多い。我々がもっと動かないといけないと感じているが、具体的に動けていない。

G 委員：素敵なポスターである。Instagram も見やすく良い。しかし、「人づて」がいちばん確実な方法なのかもしれない。顔を知っている人から聞いたことは、「やってみよう」と思える。コアとなる方への絞ることが大切である。

C 委員：ターゲットを絞り、〇〇についてはこの人、のように決めていきたい。音楽、花、地域のことなどに詳しい人はいる。チラシを配る先と目的を考えていくと良いが、教職員の長時間勤務を減らすこととは逆行してしまうかもしれない。

F 委員：コロナで立ち入りができなかったので、地域の人たちも来ていいのか分からない。PTA でも年 2 回落ち葉拾いなどをやっているのだから、そのときに地域の人を呼んでもいいのかもしれない。

A 委員：友愛では「はまぼら」を活用している。聖隷クリストファーの学生のボランティアを呼んでみてはどうか。ボランティアサークルもある。地域の人材育成にもつながる。

B 委員：聖隷クリストファー大学とのつながりを大切にしたい。得意なことを生かして授業をやってもらっても良いと思う。

(2) 令和 6 年度の学校経営に向けて

【西部特別支援学校に期待すること】

校 長：地域の人に来てくれるようなことを学校側としてもやっていかないとならない。

D 委員：もう少し学校に入りやすいと良い。ボランティアが少ないことは、高齢化で学校までの移動が大変なことも影響しているかもしれない。

E 委員：音楽の発表の場を求めている団体もあるので、ぜひ活用してもらいたい。場所を提供してもらえるとありがたい。花壇の手入れも、農家出身の人が多いため手伝えることがあるかもしれない。チラシは回覧板で回したが、カラーで全戸配布するという方法はどうか。

G 委員：学校の資源を地域の中にどう分け与えられるか。先生の負担も考えていかなければならない。公開講座のようなものができるとうれしいかもしれない。

校 長：人材を探すのは大変だが、ボランティアが増えれば教員の負担は減っていく。

C 委員：ボランティアに来てもらう段取りを考えるのは手間になってしまうが、いろ

いろな文化に触れることは成長する上で大事なことである。

F委員：地域の人には、学校に対する理解を深めてもらったり、関心を持ってもらったりしたい。中に入ってもらうことは大事である。給食の試食をしてみるのも良いかもしれない。

A委員：特別支援学校にとっての地域は、「所在地」なのか、「子供たちの居住地」なのか。地域の人には入りにくい作りになっている。センター的機能を生かしてインクルーシブ教育をやっていってほしい。

【チーム学校として、地域の方々と一緒にできること】

副校長：心肺蘇生法などの研修を地域の方たちと一緒にやっても良い

D委員：「防災士」を派遣しても良いが、資格はない。

副校長：学校には消防署の方が来てくださるので、地域の方と一緒にやるのはどうか。ボッチャ部があるので、一緒にやってみてはどうか。道具もお貸しできる。

E委員：蘇生法やAEDの研修は、やって損はないので、証明書がもらえる形でやるのはどうか。学校に来るきっかけにもなる。校内を見て分かることもたくさんある。

B委員：今後に向けて、第一歩を何にするかが大切である。

小学部主事：地域在住の農家と手紙の交流をしたり、学校周辺のお店に行って買い物をしたりしている。食育ボランティアや図書ボランティアにも来ていただき、人形劇や読み聞かせをやっていただいた。PTAの奉仕作業で地域の方に来ていただく案も出ているが、どのように参加していただくか、今後考えていきたい。

F委員：PTA活動もボランティアにしていけばよい、という意見も出ているが、取りまとめや運営をしていく人が結局必要になる。

中学部主事：コロナ禍で、近くの学校と交流することが減った。今年、久しぶりに聖隷クリストファー中学との交流が復活する。

高等部主事：いろいろ調べていく中で、車いすの人が生活しやすい街にするために考えたことはお年寄りなどの自分たち以外の人にも役に立つことが分かった。できないことも頼めばできるとわかり、自己肯定感が上がった。交流は、魅力あることをやっていきたい。

訪問主任：特産物を授業の中で活用し、地域とつながってほしい。

【本校の子供たちがどんな人に育ってほしいか】

D委員：子どもの未来に対して、夢を持てるような教育をしてほしい。

E委員：本人の興味に即しながら知識を付け、個性を伸ばしてほしい。

G委員：経験値をなるべく上げて、多感な時期にいろいろな体験をしてほしい。

C委員：好きなことをやって、楽しんでほしい。楽しくないことは続かないので、いろいろな経験をして、好きなことを見つけてほしい。

A委員：私たちの施設に西部特支の卒業生がいるが、「ハンターハンターが終わるま

で僕は生きているのだろうか」と言っていた。その彼は、今、好きなことを見つけて日々を充実させている。生きる楽しみを見つけてほしい。

F委員：本校にはいろいろな実態の子がいる。自分が思っていることを自分で発信できる子になってほしい。

B委員：卒業後の生活で、仕事や余暇、楽しい活動など、なにか核となる活動を学生のうちに育ててほしい。生活にメリハリは大事で、できれば2つはあるとよい。

校長：チラシを分けて終わりではなく、これからどうしていくかを具体的に考えなければならぬ。子供たちが頑張っている姿、一生懸命生きている姿を地域の方たちにもぜひ見ていただきたい。地域の人に来ていただいたり、こちらから伺ったりして、接点を増やしていきたい。